神田外語大学大学院紀要　言語科学研究　第27号（2021）【研究論文】pp. 47-65

フランス語の半過去と期間句の共起制限について
－日本語のテイタとの比較－

上原　由美子
（神田外語大学）

要旨

本稿では、フランス語の半過去と、「9時から11時まで」「3年間」など期間を表す表現（以下、期間句）が共起しない、または共起すると不自然になるという現象について、日本語のテイタ/テイルと比較しながら、事象投射理論（岩本2008）の枠組みで考察した。フランス語の半過去は0次元（状態）を指定するテンスであるが、期間句は1次元（動態）を要求し、両者はアスペクト的に衝突する。また、統語構造上、半過去はテンスであることから、アスペクトのレベルで解釈規則（強制）を導入してアスペクトを変更するということが不可能であり、その衝突を回避することができない。フランス語の半過去と期間句が共起しにくいことは、上記のように説明できる。

キーワード：アスペクト、テンス、概念構造、テイル、解釈規則（強制）

1．はじめに

フランス語の過去時制の一つである半過去（imparfait、英語でimperfect）は、アスペクトにおいて不完了を表し、さまざまな用法を持つ。新倉他（1996）では半過去について（1）のように説明されている。

（1）　慣習的に認められている半過去形という訳語はあまり適当なものとは思えないが、フランス語の名称imparfaitが示すように、この時制の主な機能は、《不完了》ないし《継続》を表すことにある。すなわち、過去の事象を、起点も終点も判然としないある持続として捉えるわけであり、このことから進行・状態・習慣・反覆等々の《相》を伝える用法が生まれてくる。（中略）これらの性格をひっくるめ「記憶をさかのぼって得られる《かつての現在時》を示すもの」との定義が与えられているが、たしかにこの時制は、現在形のきわめて幅広い用法と呼応するように、

過去時制の中でも最も多様な用法を持っており、最もニュアンスに富む時制と言える。（新倉他1996:232）

過去時制の中で、アスペクトとしては不完了を表す半過去と、過去の事象を丸ごと捉える複合過去（passé composé）または単純過去（passé simple）（両者の違いは2.1で述べる）の対立を表す文として（2）のような例がよく挙げられる。

（2） Quand il *est entré* dans le salon, je *regardi s* la télévision.
彼が居間に入ってきたとき、私はテレビを見ていた。
（複合過去）（半過去）
（井元2017:108、下線と（　）内は筆者）

（2）では、半過去は日本語の「テイタ」に対応し、過去の動作継続を表している。日本語のテイタと、フランス語の半過去は、いずれも不完了を表すという点で対応関係にあるといえる。しかし、両者は常に対応する訳ではない。文法カテゴリーの点では、テイル/テイタはアスペクトであり、過去、現在など複数のテンスにおいて実現され得るのに対し、半過去は基本的にはテンスとされているという違いがある。また、テイタは動作継続の他にも結果継続、パーフェクトなどの用法があるが、フランス語の半過去にはさまざまな用法があるなかで、テイタが表すような結果継続やパーフェクトの意味は表さない。特に興味深いのは、井元（2010、2017）が指摘するように、テイタは、「私は9時から11時まで本を読んでいた」「私はフランスの学校に3年間通っていた」のように期間を表す表現と問題なく共起するのに対し、フランス語の半過去は、これらの表現と共起しない、または不自然になるという違いである（井元2010:191、井元2017:14）。

本稿では、このような期間を表す表現（以下、期間句）との共起制限について、フランス語の半過去と日本語のテイタの間になぜ違いがあるのか、半過去ではどのようなメカニズムで共起制限がかかるのか、「事象投射理論」（岩本2008）の枠組みで考察する。なお、テイタについては、アスペクトとしては「テイル」の性質と共通するところが多いため、議論に影響しない限りにおいて、テイル

に関する研究を援用する。

２．フランス語の半過去の概要

2.1 半過去と単純過去・複合過去

フランス語の過去形には、不完成相を表す半過去と、それとアスペクト的に対立する単純過去および複合過去がある。単純過去と複合過去の違いについては、本稿の議論と関わらないが、簡単に述べておく。単純過去は、「現代フランス語では文章語においてのみ用いられ、歴史的叙述、物語、小説などできわめて頻繁に見られる」（新倉他1996：244）とされている。一方、複合過去は、「近代フランス語において、複合過去形はまず何よりも《口語的》過去形としてある。（中略）元来、複合過去形は現在形に対応する完了形であり、形態的には現在完了形と同等のものである」（同：227）とされている。つまり、複合過去は、現在完了の意味から過去を表す形式へと拡張されたものである。両者には文章語と口語という違いの他にも様々な違いが存在するが、半過去とアスペクト的な対立があるという点は共通している。

フランス語のテンス・アスペクトに関する先行研究においては、半過去と対立するものとして、通常、両者のどちらかが用いられている。本稿でも、先行研究に言及する際、議論に影響しない限り、単純過去と複合過去の違いは考慮に入れず、半過去とアスペクト的に対立するものとして両者を同様に扱うことを断っておく。

2.2 半過去の用法

半過去には様々な用法があり、半過去を対象とする研究は多い。半過去の用法の分類や名づけについては研究者によって異なるが、以下では、井元（2010、2017）および新倉他（1996）に基づき、用法をまとめる。井元（2017）では、半過去の基本的な用法として、（3a）「過去の状態」、（3b）「過去の行為の継続」、（3c）「過去の行為の反復」、（3d）「過去の習慣」が挙げられている。

（3） a. J’ai rencontré une jeune fille hier. Elle *<u>était</u>* très belle.
昨日若い女性に出会った。彼女はとても美し<u>かった</u>。
b. Marie s’est retournée vers moi. Elle *riait*.

マリーは私のほうを振り向いた。笑っていた。

c. L'image de Jenny *passait et repassait* devant ses yeux.
Jennyの面影が目の前を行ったり来たりした。（朝倉2002）

d. Quand j'étais petit, j'*allais* à l'école avec ma sœur.
子供の頃、私は妹と学校に通っていた。

（井元2017:111、下線は筆者）

また、半過去は、背景の描写にも用いられる。新倉他（1996）は、この用法について、「描写の半過去形」として（4）のように述べている。

（4）（前略）しばしばそれは優れて描写的な効果をもたらす。物語では、中心的事件を単純過去形・複合過去形で述べ、その背景となる状況、あるいは登場人物・語り手の心理などを半過去形で語る場合が多いが、半過去形一本で描写が進められることも少なくない。

（新倉他1996:233）

ここまでは、不完成相のアスペクトとして、状態性を表す一般的な用法と言えるが、半過去には、他にも様々な用法がある。特に、よく研究の対象となる用法に、小説等で用いられる「語りの半過去」または「絵画的半過去」と呼ばれる用法がある。継起的な出来事を述べる際に使われ、単純過去に置きかえても意味は変わらず、ただそこにニュアンスが加わるとされる用法である。この用法の一種と言われる「切断の半過去」という用法もある。半過去には、その他にも「試みの半過去」「語調緩和の半過去」「市場の半過去」「愛情表現の半過去」「遊戯の半過去」「間一髪の半過去」など、「~の半過去」と呼ばれる数多くの用法がある（井元2010、2017、新倉他1996他）。ただし、本稿では、（3）で挙げた半過去の基本的な用法のみ扱い、その他の用法については立ち入らない。

3．問題となる現象:共起制限

井元（2010、2017）は、（5）のように期間を示す表現と半過去を同時に使うと不自然になり、通常、期間を示す表現がある場合は、半過去ではなく複合過去または単純過去が使われるとしている[1]。特に（5b）のように「*pendnt* ＋

期間」という表現は半過去とは共起しないとしている。*pendnt* は英語の*for*に相当する、期間を表す前置詞である。

（5） a. ?Je *lisais* (un livre) de 9 heures à 11 heures.[2、3]
私は9時から11まで本を読んでいた。
（井元2017:14、108、下線は筆者）

b. *Je *fréqe ntais* une école française pendant trois ans.
私はフランスの学校に3年間通っていた[4]。
（井元2010:191、同上）

（5a,b）に見られるように、日本語では、期間句とテイタは共起するのに対し、フランス語の半過去では、共起しない、または不自然になるという共起制限がある。本稿では、このような期間句との共起制限に関する、テイタと半過去の違いについて考察する。

4．De Swart（1998）による半過去の分析

本章では、半過去のアスペクト的特徴について、De Swart（1998）の分析を概観する。De Swart（1998）は、coercion（強制）という概念を用い、Discourse Representation Theory（DRT）の枠組みで、フランス語と英語のアスペクト変更の現象を比較し分析している。De Swart（1998）は、英語の進行形や完了形がアスペクトであるのに対し、フランス語の半過去と単純過去は「アスペクトに敏感なテンス」だとしている。具体的には、半過去は均質的（homogeneous）なeventuality（De Swartの用語ではstateとprocessに相当）を過去に位置付けるオペレータであるとする。一方、単純過去は、量子化された（quantized）eventuality（De Swartの用語ではeventに相当）を過去に位置付けるオペレータであるとする。そして、それぞれの条件を満たさないeventuality（以下、事象）と結びつく場合は、衝突を回避するためにcoercion（強制）が導入されアスペクト変更が起こるとしている。

以下、詳しく見ていく。De Swart（1998）は、Comrie（1976）によれば「テンスはある事象の時間を他の時間と関係づけるもの」であり、「アスペクトは

事象の内的時間構成のさまざまな見方である」としている。そして、テンスはアスペクトのすべての仕事が行われたあとで作用すると仮定され、文の統語構造は（6）のようになるとしている。「*」は0または1以上を表す。

（6）［Tense［Aspect*［eventuality description］］］

（De Swart 1998:348）

また、De Swart（1998）は、名詞の捉え方を事象に敷衍し、事象には、state、process、eventの3つのタイプがあり、stateとprocessは固有の終結点を持たず、eventは固有の頂点を持つとする。processとeventはnon-stativeであり、この二つの上位概念としてdynamic事象という上位カテゴリーが設けられ、これらが図1にまとめられている。

HOMOGENEOUS		QUANTIZED
state	process	event
STATIVE	DYNAMIC	

図1　（De Swart 1998:351）

英語の進行形や完了形といった文法アスペクトや期間副詞句などはアスペクトオペレータを導入するが、アスペクトオペレータは、事象のアスペクトを変更するものとしている。例えば、進行形は動的な事象を進行中というstateに写像するアスペクトオペレータPROGを導入する。PROGのような明示的なアスペクトオペレータとは別に、事象のアスペクトと文脈中の要素のアスペクトが衝突する際に導入される、形態的・統語的に不可視の再解釈のプロセスがcoercion（強制）であるとしている。強制によって引き起こされるアスペクト変更を明示するために次の3つの強制オペレータが導入されている。C_{eh}はeventからhomogeneousな事象への、C_{he}はhomogeneousな事象からeventへの、C_{sd}はstateからdynamicな事象への強制オペレータである（De Swart 1998: 360）。例えば（7a）の構造は（7b）である。もともとstateである［Susan like this play］が進行形へのインプット条件を満たすために、強制オペレータCsdによってdynamic事象に強制されている。

（7） a. Susan is liking this play.
b.［PRES［PROG［C_{sd}［Susan like this play］］］］（同 : 363）

De Swart（1998）は、英語とフランス語を比較し、フランス語の半過去と単純過去はアスペクトに関連しているが、それは英語の進行形などの明示的なアスペクトとは異なるものであるとし、フランス語の単純過去と半過去について、以下の仮説を提示している。

（8） 単純過去と半過去は、アスペクトに敏感な過去のテンスオペレータである。具体的には、単純過去はeventを、半過去はstateまたはprocessを表す。（同 : 368、訳は筆者）

もとの事象が、それぞれ（8）の通りである場合は選択制限を満たすため適格となるが、そうでない場合は強制オペレータが導入されるとする。例えばフランス語には進行形を表す動詞の形がないが、（9）ではもともとeventである事象が半過去（IMP）と組み合わされることによりアスペクト衝突が起こり、強制オペレータのC_{eh}が導入され、進行中の出来事と解釈される。

（9） a. Jeanne écrivait une lettre. (*Jeanne wrote -IMP a letter.*)
b.［PAST［C_{eh}［Jeanne write a letter］］］（同 : 371）

またDe Swart（1998）は、半過去は結果として事象がstateかprocessになる限り基本的にはいかなる写像も許容するとしている。半過去が英語の進行形よりも広い意味を表すのは、半過去には進行形の解釈だけでない、このような、より自由なアスペクト移行があるからだとしている（p.372）。

本稿では、以上のDe Swart（1998）の主張について、①半過去と単純過去はアスペクトに敏感なテンスである（つまり、特定のアスペクトを指定するテンスである）、②アスペクトが衝突する場合は強制が起きる、という2点について支持する。ただし、強制の具体的な方法として、設定されているC_{he}、C_{eh}、C_{sd}という個別の強制オペレータについては、その必要性および根拠について検討の余地があると考えている。また、また岩本（2008）が指摘するように、

強制によって導入されるPROG等いくつかの関数の意味的操作の内容、および互いの間の関係などについては議論されていない（岩本2008:268）点も問題が残る。具体的に、どのようなメカニズムで、2.2で見たような半過去のさまざまな用法が実現するのか、それについては今後の課題としていきたい。ひとまず、本稿では、De Swart（1998）の半過去に関する主張のうち、上記①②にを採用し、次章で概観する「事象投射構造」の枠組みを用いて、期間句との共起制限について分析を試みる。

5．理論的枠組み:岩本（2008）事象投射理論

岩本（2008）は、Jackendoff（1996）の「構造保持束縛理論」を修正発展させ、「動き」「変化」といった概念をより単位的な素性対立によって定義し、一貫した体系性の中に事象のアスペクトが定義される「事象投射理論」を提案した。本稿では、事象投射理論の枠組みで半過去の概念構造を定義するにあたり、岩本（2008）による日本語のテイルの概念構造について概観する[5]。

5.1 テイルの定義

テイルは、多くの先行研究で示されているように、動作継続、結果継続、パーフェクト、反復、習慣などさまざまな意味を表す。岩本（2008）は、テイルの多義性は、事象とテイルの概念的意味の計算により明示的に説明が与えられるとしている（p.177）。テイルの概念構造は（10）と定義され、（11）のように説明されている。

（10）テイルの概念構造 $\begin{bmatrix} & [0d] \\ & \langle CRS \rangle \uparrow \\ & \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ -b \end{bmatrix} \\ Time & \end{bmatrix}$

（岩本2008:186）

（11）（10）の構造は、非限界時間を0次元化するCRS関数こそがテイルの概念的意味であることを表している。

テイルの文では、もとの事象の概念構造と（10）が単一化された結果、その

計算により、さまざまな解釈を持つ概念構造が実現する。なお、（10）の中で、0dは0次元（状態）、1dは1次元（動態）、-bは-bounded（非限界的）、+dirは+directed（投射が方向づけられたものである）を表している。

5.2 動作継続を表すテイル

動作継続を表すテイルの概念構造は（12）のようになる。

（12）「流れている」（動作継続）の概念構造

$$\left[\begin{array}{l} \begin{array}{r} [0d] \\ \textit{相変換関数並行適用} \Rightarrow \langle CRS\rangle^{\beta} \uparrow \\ \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{bmatrix} \\ \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \end{array} \quad \textit{テイル} \left\{ \begin{array}{r} [0d] \\ \langle CRS\rangle^{\beta} \uparrow \\ \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{bmatrix} \\ \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \end{array} \right. \\ {}_{Sit}\ BE([X], \qquad [_{Space}\ 0d]); \qquad [_{Time}\ 0d] \end{array}\right] \Bigg\} \textit{流れる}$$

（岩本2008：189、「流れる」の表示は筆者）

テイルのない「流れる」だけの構造は省略するが、（12）の構造の下の部分がこれに相当する。「流れる」の構造を補足すると、一番下の0次元（0d）の「BE［X］, [Space 0d]）;[Time 0d]」がPR（projection）関数で1次元（1d）に投射されている構造である[6]。PR関数の素性に示されているように、「流れる」は［-b]（-bounded 非限界的）の「動作」を表す事象である（他の素性表示の説明は省略する）。「流れる」の概念構造と「テイル」の概念構造（10）を単一化すると（12）となる。（11）によるとテイルは時間項（[Time]）を0次元化するものであるが、（12）では空間項（[Space]）も同様に0次元化されている。これは（13）の原則に基づく。

（13）「相変換関数の相同項への並行的適用の原則」
相変換関数が一つの項に適用するとき、適用を阻害する要因がない限り、それと相同的な項にも同様に適用する。　（岩本2008：190）

つまり、「流れている」（12）では、テイル自体は時間項だけを0次元化するが、空間項に並行的適用を阻害する要因がない（[-b]である）ことにより、空間項も0次元化される。このように、結果として、時間項と空間項の両方が0次元化された構造が、動作継続を表す構造となる。

なお、岩本（2008）では、動作継続の他、結果継続、パーフェクト、反復など、テイルの他の解釈を表す概念構造も提示されているが、本稿の分析には直接関わらないため省略する。

6．分析

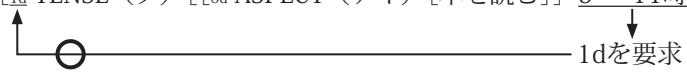
6.1 結論

（5）で見たように、通常、半過去は期間句とは共起しないか、共起すると不自然になる。（5）に相当する日本語のテイタの文（「私は9時から11時まで本を読んでいた」「私はフランスの学校に3年間通っていた」）は、問題なく言えるのに対し、なぜ、半過去は期間句と共起しにくいのか。

まず、結論を先に述べ、続いて岩本（2008）のテイルに関する分析を用いて説明を補足する。

フランス語の半過去が期間句と共起しにくいことは、半過去が、テンスであること、特にDe Swart（1998）が主張するように「アスペクトに敏感なテンス」であることが影響していると考えられる。具体的には次のように説明できる。（5a）のテイタの文「私は9時から11時まで本を読んでいた」と、対応する不自然な半過去の文の構造を簡単に示すと、それぞれ（14a）（14b）のようになる。

（14）a. [$_{1d}$ TENSE（タ）[[$_{0d}$ ASPECT（テイ）[本を読む]] 9～11時]]



b. ? [$_{0d}$ TENSE（IMP）[[本を読む] 9時～11時]]

まず、テイタの（14a）では、「アスペクトで0次元化（状態化）された事象が指定された期間（9時から11時まで）続く」ということが、最後にテンスによっ

て時間軸上に位置付けられる。この際、「9時から11時まで」という期間句により、事象が1次元であることが要求される（期間句が1次元を要求することについては6.2で述べる）。ここで、日本語のテンスには次元（d）の指定がなく、つまり、非過去も過去も、完成相と不完成相のいずれをも（ル、テイル、タ、テイタ）取ることができる。したがって、（14a）は、期間句の次元である1次元に合わせ、問題なく1次元の事象となることが許容される。

半過去の（14b）では、半過去が不完成相アスペクトをあらわすことから0次元を指定すると考えられる。しかし、上述したように「9時から11時まで」という期間句は1次元の事象を要求することから、これと衝突する。さらに（6）で見たように、テンスである半過去は統語構造上アスペクトより外側にあり、テンスはアスペクトのすべての仕事が行われたあとで作用すると仮定されることから、テンスの位置においては、もはや解釈規則（強制）によってアスペクトを変更して衝突を回避することはできない。また、仮に衝突を回避すべく事象を0次元化しようとすると、解釈規則（強制）が導入されて0次元化されることになるが、その場合、1dである「9時から11時まで」の意味が破棄されることになる。これは後述する「解釈規則による投射構造の空虚化を禁ずる原則」（岩本2008 : 157）に抵触することになり、この構造は不適格となる。

以上が、期間句が半過去と共起しない、または不自然になるメカニズムであると考えられる。

次に、上述した、期間句が1次元を要求することの根拠と、「解釈規則による投射構造の空虚化を禁ずる原則」について、岩本（2008）のテイルに関する分析に基づいて補足する。

6.2 期間句が1次元を要求すること

期間句が1次元を要求することについては、期間句の概念構造として、非限界的実体を限界化する関数であるCOMP（Composed of）が適用されること（岩本2008 : 124）、およびCOMPが1次元の実体に適用されることから説明される。例えば、「10時まで走った」の概念構造は（15）のようになる。

（15）太郎は10時まで走った

$$
\begin{bmatrix}
 & \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +b, -i \\ bdby^{+}([l_i]) \end{bmatrix} & \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +b, -i \\ bdby^{+}([10\ 時]) \end{bmatrix} & \left.\begin{matrix} \\ \\ \end{matrix}\right\} \text{10 時まで} \\
 & \left\langle \begin{matrix} COMP \\ bdby^{+}([l_i]) \end{matrix} \right\rangle^{\beta} \uparrow & \left\langle \begin{matrix} COMP \\ bdby^{+}([10\ 時]) \end{matrix} \right\rangle^{\beta} \uparrow & \\
 & \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ -b, -i \end{bmatrix} & \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ -b, -i \end{bmatrix} & \left.\begin{matrix} \\ \\ \end{matrix}\right\} \text{走る} \\
 & \left\langle \begin{matrix} PR \\ 1d, +dir \\ -b, -i \end{matrix} \right\rangle^{\alpha} \uparrow & \left\langle \begin{matrix} PR \\ 1d, +dir \\ -b, -i \end{matrix} \right\rangle^{\alpha} \uparrow & \\
{}_{Sit}\ BE([太郎], & [{}_{Space}\ 0d]); & [{}_{Time}\ 0d] &
\end{bmatrix}
$$

岩本（2008:124、「走る」「10時まで」の表示は筆者）

（15）は、「走る」という非限界事象（-b）が、COMPである「10時まで」という期間句によって限界化（+b）されていることを表している[7]。なお、（15）はテイルの文ではなく、完成相であるタ形の文であり、もともと1次元の事象である（（12）の説明を参照）。したがって、一貫して1次元であり、COMPによって次元が変わることはない。しかし、テイルの文では事情が異なる。（16）は「太郎はここで午後6時まで走っている」という、期間句を含む、動作継続を表すテイルの文の概念構造である。

（16）午後6時まで走っている

$$
\begin{bmatrix}
\begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^{+}([l_i]) \end{bmatrix} & \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^{+}([6PM]) \end{bmatrix} & \\
\left\langle {}^{COMP}_{bdby^{+}([l_i])} \right\rangle^{\delta} \uparrow & \left\langle {}^{COMP}_{bdby^{+}([6PM])} \right\rangle^{\delta} \uparrow & \text{6 時まで} \\
\begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{bmatrix} & \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{bmatrix} & \\
\left\langle \begin{matrix} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{matrix} \right\rangle^{\gamma} \uparrow & \left\langle \begin{matrix} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{matrix} \right\rangle^{\gamma} \uparrow & \leftarrow \text{解釈規則} \\
[0d] & [0d] & \\
\langle CRS \rangle^{\beta} \uparrow & \langle CRS \rangle^{\beta} \uparrow & \text{テイル} \\
\begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +den \\ -b, -i \end{bmatrix} & \begin{bmatrix} 1d, +dir \\ +den \\ -b, -i \end{bmatrix} & \\
\left\langle \begin{matrix} PR \\ 1d, +dir \\ +den \\ -b, -i \end{matrix} \right\rangle^{\alpha} \uparrow & \left\langle \begin{matrix} PR \\ 1d, +dir \\ +den \\ -b, -i \end{matrix} \right\rangle^{\alpha} \uparrow & \text{走る} \\
{}_{Sit}\ BE([X], \quad [{}_{Space}\, 0d]); & [{}_{Time}\, 0d] &
\end{bmatrix}
$$

岩本（2008:197、「走る」の表示は筆者）

（16）では、「走る」がテイルで0次元化され、その後、COMPである「6時まで」と単一化されるが、その際、概念上の矛盾（衝突）を解消するために解釈規則によってPRが導入される（岩本2008：197）。つまり、0次元であるテイルの事象を「午後6時まで」という期間句（COMP）によって直接限界づけることは不可能であることから、解釈規則により0次元を1次元にする関数であるPRが導入される。（14）で「期間句が1次元を要求する」と述べたことは、以上のように説明される。

6.3「解釈規則による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」

次に、「解釈規則による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」（岩本2008：157）について補足する。（16）は、期間句を伴うテイルが動作継続を表す例であるが、同様に期間句を伴うテイルの文でも、「10分間走っている」のように、動作継続の解釈が不可能な文もある[8]。

なぜ、「午後6時まで走っている」が動作継続の解釈が可能であるのに対し、「10分間走っている」は動作継続の解釈が不可能なのか[9]。その違いは、「午後6時まで走っている」の動作継続の解釈は、「走っているという0次元状態」が「6時まで」継続することを表しており、[午後6時まで+[ここで走っている]]という構造を持つ（岩本2008：196-197）。これは、発話時において「6時まで」続くとわかっていることであることから、動作継続の文として解釈できるものと考えられる。一方、通常「10分間」は動作終了時に計測され決定される期間であり、動作継続の解釈では、走っている時点、つまり発話において「10分間」と測ることはできない。したがって、[10分間+[走っている]]ではなく、[[10分間走る]+テイル]という構造になる。しかし、以下に述べるように、動作継続としてはこの構造は不適格となる。

（17）10分間走っている。・・動作継続としては不適格

$$
\begin{array}{l}
\left[\begin{array}{cc}
[0d] & [0d] \\
\langle CRS\rangle^{\delta}\uparrow & \langle CRS\rangle^{\delta}\uparrow \\
\begin{bmatrix}1d,+dir\\+den,-b,-i\end{bmatrix} & \begin{bmatrix}1d,+dir\\+den,-b,-i\end{bmatrix} \\
\langle GR\rangle^{\gamma}\uparrow & \langle GR\rangle^{\gamma}\uparrow \\
\begin{bmatrix}1d,+dir\\+den,+b,-i\\bdby^{+}([l_i])\\bdby^{-}([l_j])\end{bmatrix} & \begin{bmatrix}1d,+dir\\+den,+b,-i\\bdby^{+}([t_i])\\bdby^{-}([t_j])\\t_i-t_j=10min\end{bmatrix} \\
\left\langle\begin{matrix}COMP\\bdby^{+}([l_i])\\bdby^{-}([l_j])\end{matrix}\right\rangle^{\beta}\uparrow & \left\langle\begin{matrix}COMP\\bdby^{+}([l_i])\\bdby^{-}([l_j])\\t_i-t_j=10min\end{matrix}\right\rangle^{\beta}\uparrow \\
\begin{bmatrix}1d,+dir\\+den,-b,-i\end{bmatrix} & \begin{bmatrix}1d,+dir\\+den,-b,-i\end{bmatrix} \\
\left\langle\begin{matrix}PR\\1d,+dir\\+den,-b,-i\end{matrix}\right\rangle^{\alpha}\uparrow & \left\langle\begin{matrix}PR\\1d,+dir\\+den,-b,-i\end{matrix}\right\rangle^{\alpha}\uparrow \\
BE([X], & [_{Time}\,0d] \\
[_{Space}\,0d]); & \\
Sit &
\end{array}\right]
\end{array}
$$

テイル

←解釈規則

←空虚　（10分間）

走る

（岩本2008：219、「走る」「10分間」の表示は筆者）

（17）が動作継続としては不適格になることについて、岩本（2008）では、おおよそ次のように説明されている。

COMPによって限界づけられた項にCRS（テイル）を適用するためには、いったん解釈規則によってGR（grinder : 非限界化関数）という関数を導入して[+b]を[-b]に変換しなければならない。しかし、このようにGRで非限界（-b）化すると、「10分間」の概念的意味が、計算上、概念構造の中から失われてしまい、「10分間」の構造が空虚なものとなってしまう（岩本2008 : 219）。なお、GR（grinder : 非限界化関数）という関数を導入して限界的（[+b]）を非限界的（[-b]）に変換しなければならない理由は、CRS（テイル）は[1d,-b]を[0d]に変換するものであるから、それが適用される項は、境界を取り払われた非限界実体[-b]でなければならないからである（岩本2008 : 192）。「10分間走っている」が動作継続の意味を持ちえないことは、以上のように説明される。

なお（17）のように、解釈規則が、概念構造の一部を取り消すことができないことは、（18）の原則として提示されている。

（18）「解釈規則による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」
解釈規則は、それが適用する事象投射構造の一部あるいは全部を取り消すことはできない」（岩本2008:157）

（18）の原則は、解釈規則が無制限に導入されると、事象投射構造にどのような変更でも加え得る無制限な理論になり、説明力のないものとなってしまうため、それに制限をかけるためのものである（岩本2008 : 156）。同様の制限として、De Swart（1998）でも、「強制」（coercion）が適用する場合、もとの事象の内部構造を保持しなければならないという条件を課している（岩本2008 : 157）。

なお、誤解のないように述べておくと、上記では、テイルの文において、「6時まで」（動作継続の解釈が可能）と「10分間」（動作継続の解釈が不可能）で、テイルの解釈に違いが出ることを述べたが、これは、あくまでも「解釈規則による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」の説明のために例にあげたものである。「～まで」と「～間」の違いは、フランス語の半過去の共起制限には直接関係なく、半過去では、（5）で見たように、どちらにも共起制限がかかる[10]。

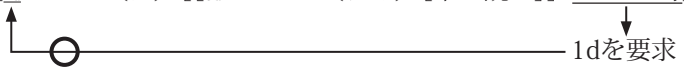
日本語でも、過去テンスの「テイタ」の場合は、「昨日の午後は、3時間ゲームをしていた」など、「～間」について動作継続の解釈も可能である。これは「テイタ」の場合は、発話時から見れば、動作が終わった時点で時間を測ることができたからであると考えられる。繰り返しになるが、半過去の共起制限を考える上で重要なのは、「～まで」と「～間」の違いではなく、半過去と期間句が共起すると、期間句の概念構造が取り消されて（つまり空虚になって）しまい、「解釈規則による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」に抵触することにより、共起制限がかかるという点である。

6.4 結論の再確認

6.2と6.3の補足説明を踏まえた上で、半過去の話に戻って、結論を再度確認する。

（19）＝（14）

a. ［$_{1d}$ TENSE（タ）［［$_{0d}$ ASPECT（テイ）［本を読む］］9～11時］］



b. ?［$_{0d}$ TENSE（IMP）［［本を読む］9時～11時］］

（19a）のテイルの文は、（16）の「6時まで走っている」と同様の構造を持つ。つまり、[9時から11時まで+[本を読んでいた]]の構造である。「9時から11時まで」はCOMPで限界付けられていることから1次元となる。そして、日本語のテンスは、特定のアスペクトを指定しないため、テイタの（19a）では、「0次元化（状態化）された事象が指定された期間（9時から11時まで）続く」ということが、最後にテンスによって特に問題なく時間軸上に位置付けられる。こうして、動作継続の解釈が得られる適格な文となる。

一方、半過去の（19b）も、COMPで「9時から11時まで」と限界付けられて1次元となる。しかし、半過去はアスペクトではなくテンスであり、かつDe Swart（1998）が指摘するように、「アスペクトに敏感なテンス」である。

半過去は動作継続等の不完成相アスペクトを表すことから0次元を指定すると考えられ、ここで期間句のCOMPによる1次元と半過去による0次元のアスペクト衝突が起こる。さらに、テンスである半過去は、（6）で見たように、統語構造上アスペクトより外側にあり、アスペクトに関しての処理は終わった位置にあることから、衝突回避のために解釈規則（強制）によってアスペクトを変更することはできない。仮に衝突を回避すべく事象を0次元化しようとすると、解釈規則（強制）が導入されることになるが、その場合、1次元である「9時から11時まで」の概念構造が破棄されることになる。これは「解釈規則による投射構造の空虚化を禁ずる原則」(岩本2008 : 157)に抵触することになり、この構造は不適格となる。

以上が、期間句が半過去と共起しない、または不自然になるメカニズムであると考えられる。

7.おわりに

本稿では、フランス語の半過去が期間句と共起しない、または共起すると不自然になることについて、「事象投射理論」の枠組みで分析し、そのメカニズムを示した。今回は、期間句との共起制限に関する問題だけを扱ったが、半過去には、「3回~した」など回数を表す表現と共起しにくいという現象もあることが指摘されている(井元2010 : 191)。また、そもそもフランス語の半過去は、どのような概念構造を持っているのか、テイル/テイタや英語の進行相など他の不完成相と何が共通していて何が異なるのか、またどのようなメカニズムで数多くの用法が可能になるのか。これらのことを本稿の枠組みで明らかにしていくことは今後の課題である。

謝辞

本稿の執筆にあたり、査読の先生方に大変有益なコメントをいただき、修正することができました。ここに感謝いたします。

注

1. 井元（2010、2017）では、フランス語の時制についてメンタルスペースの枠組みで分析されており、期間句との共起制限についてもその観点から考察されている。
2. 井元（2017）では「?」ではなく「×」となっている。井元（2017）は学習者向け書籍であるからか、全編にわたって文法性判断については「×」のみが使われている。当該例文の説明、および井元（2010）における他の例文の文法性判断とそれに対応する記述との比較等から判断し、ここでは「?」と記した。
3. ただし、尋問の答えなどで「9時から11時ですか、そうですね、本を読んでいました」のような文脈では半過去でも問題ないとのこと（井元2017 : 14）。これに関する分析は、本稿では扱わず今後の課題としたい。
4. 井元（2010）では、訳は「私はフランスの学校に3年間通った」となっている。過去の習慣を表すという点では「通った」と「通っていた」で意味は変わらないため、本稿では「テイタ」と半過去を比較していることから、「通っていた」と表記した。
5. 岩本（2008）では、「テイル」としてアスペクトに焦点をあてて分析されており、テイル/テイタのテンスの区別に関しては特に扱われていない。本稿でも、岩本（2008）に言及する際は、原著のまま「テイル」と表記する。
6. 空間項と時間項の関数同士は「構造保持束縛」(structure preserving binding)の関係にある（岩本2008 : 123）。「構造保持束縛」に関しては、岩本（2008）、Jackendoff（1996）を参照されたい。
7. （15）の構造の中のbdby^{+}（bounded by +）は、終端において限界づけられていることを表す（岩本2008 : 93）。
8. なお、「10分間走っている」は、動作継続の解釈は不可能であるが、パーフェクトや反復（「毎日、10分間走っている」など）の解釈は可能である。パーフェクトや反復を表す適格な概念構造は岩本（2008）で示されている。
9. 「10分間走っている」と「午後6時まで走っている」の動作継続解釈の容認性の差異は明確でないと感じられるかもしれない。しかし、例えば「2年間パリに住んでいます」と「来年3月までパリに住んでいます」のように、「～まで」が発話時より後であることが明確な文脈であれば、前者が動作継続解釈が不可能でパーフェクトの解釈のみが可能であるのに対し、後者は動作継続の解釈が可能であるという差異がより明らかである。
10. ただし、半過去の期間句の共起制限にはグラデーションがあり、*pendant*（「～間」に相当）は、期間句の中でも「特に（中略）半過去とは共起しない」（井元2010 : 191）とあり、共起制限が強いようである。動作継続のテイルにおいて、「～間」が共起しないことと関連性がある可能性はある。

参考文献

朝倉季雄（2002）『新フランス文法事典』白水社

井元秀剛（2010）『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房

井元秀剛（2017）『中級フランス語　時制の謎を解く』白水社

岩本遠億（2008）『事象アスペクト論』開拓社

新倉俊一・朝比奈誼・稲生永・井村順一・冨永明夫・宮原信・山本顕一（1996）『改訂版フランス語ハンドブック』白水社

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, Cambridge University Press, Cambridge.

De Swart, Henriëtte (1998) “Aspect shift and coercion”, *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 347-385.

Jackendoff, Ray (1996) “The proper treatment of measuring out, Telicity, and perhaps even quantification in English,” *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-354.